

パルマコスの変則
—醜の美学から考える建築形態の研究—建設工学専攻
空間デザイン研究ME20059
指導教員きむ よんびん
金 淵彬
谷口 大造

序論 本論に関して

0-1. 研究背景

美は「美的直感の対象性に関する概念であり、美的なものの一般的抽象概念」である（下中邦彦、1964 年、p1133）。人間は歴史を通じて、建築における機能、形状、空間の研究を通じて、「美しい建築」の追求が続けてきた。対照的に、「醜」は美の反対概念として捉えられ、その定義は時代の変遷と共に進化し、絵画やファッション分野では独立した概念として認識され、積極的に探究されてきた。しかし、建築分野においては、「醜」は依然として美の反対概念として捉えられ、批判の対象である。この点に着目し、建築における「醜」の研究や表現手法の提案に意義があると考えられる。

パルマコス (pharmakos) は、古代ギリシャでの災害や社会的不安の際に、共同体の浄化や民心の安定を図るために行われた、見た目が醜い人物にすべての罪を負わせて神に捧げる儀式を指す。古代ギリシャにおける「醜」は、外見的な美の欠如だけでなく、内面的な堕落や悪を象徴する重要な意味を持っていた。本研究は、「醜」の概念が美の単なる反対概念から独立し、多様な形で発展してきたことに着目し、パルマコス（醜）の変遷を主題とし、その美学を通じて建築の空間形態に関する研究を行う。

0-1. 研究目的

形容詞「醜い」の辞書的な意味は

①見ていやな感じがする。見苦しい。

②容貌が悪い。みめがよくない。

と「広辞苑第七版」に記されているが、哲学や美学の範疇ではより広い認識として捉えられる。

ウンベルト・エーコは著書「醜の歴史」で、「醜」はほとんど常に美と対立するものとして定義されてきたが、「醜」と「美」の概念が必ずしも対立するものではないことを主張した。彼は、一般の人々の趣味が同時代の美術家たちの趣味とある程度一致するというのは単なる「仮定」に過ぎないと述べ、そのような仮定は他の時代や文化圏では必ずしも通用しないと指摘した。そこで本論文では時代や文化による「醜」の概念の変化を分析し、解体主義ファッションでの「醜」の表現手法を分類することで、建築における「醜」の表現手法を提案することを目指していく。

0-2. 本論の構成

本論文は 7 つの章から構成されている。本項では本論の流れを説明しながら、研究方法について簡潔に調べる。第一章では哲学的な美学の概念や建築の美学の概念を分析することで「醜」について研究するに先立って建築で追求する「美」を説く。第二章では「醜」の概念や 19 世紀までの醜の認識変化の歴史や東洋での醜を記している。第三章では醜が独立概念として定着し始めた現代における「醜」を絵画、建築、ファッションの観点で調べ、これからの「醜」の表現を推察する。第四章ではファッションでの醜の表現手法を分類することで醜の手法の議論化を目指す。第五章では第

四章での分類のもとに建築の事例の類型化を行い、「建築の醜」を構成するかたちを考察する。以上の結果を踏まえ、第六章からは朝鮮半島の DMZ(非武装地帯)を対象敷地として、これまでの章で提案した設計手法を取り入れて空間を示すことで、本研究の結びとする。

第一章 美学について

1-1. 美学の定義

1-2. 醜の定義

1-3. 「醜の美学」での醜

1-4. 「美学理論」での醜

1-5. 「醜の歴史」の醜

1-6. 醜の概念の比較

第一章「美学について」は、美学と醜の定義とその歴史的発展を探る。美学は美を追求する学問で、古代ギリシャから現代に至るまで進化してきた。建築における美学は、形態や空間などを通じた美的価値の研究である。「醜」は伝統的に美の対立概念とされてきたが、カール・ローゼンクランツ、テオドル・アドルノ、ウンベルト・エーコによる研究を通じて、醜の複雑さと芸術的価値が再評価された。特にアドルノの「美学理論」は、現代社会の複雑さを反映し、醜を芸術と社会批評の重要な要素として位置づける。

第二章 醜の歴史

2-1. 古代の醜

2-2. 中世の醜

2-3. 東洋の醜

2-4. 19 世紀以後の醜

第二章「醜の歴史」では、古代から現代に至る醜の概念の変化を探る。古代では、醜は道徳的、倫理的価値と結びつき、特にギリシャやローマ文化で重要な役割を果たした。中世ヨーロッパでは、キリスト教の影響により醜は宗教的堕落の象徴とされた。東洋では、醜はバランスと調和の観点から異なる解釈を受け、日本の「侘び寂び」などがその例である。19 世紀以降、産業革命と近代化に伴い、醜の概念は大きく変化し、新しい芸術運動によって再解釈された。この変遷を通じて、醜の意味は文化や時代によって進化し続けている。

第三章 現代における醜

3-1. 美術での醜

3-2. 建築での醜

3-3. ファッションでの醜

第三章「現代における醜」では、現代の美術、建築、ファッションにおける醜の役割と意義を探る。現代美術では、醜は伝統的な美の概念を超える革新的な表現方法として位置づけられている。建築分野では、ブルータリズムや解体主義などのスタイルを通じて、伝統的な形態や構造に対する挑戦が見られる。ファッションでは、解体主義や非定型的デザインが伝統的な美の基準に挑戦し、新しい美の基準を提示している。

第四章 ファッションでの醜の手法

4-1. 醜の手法の分類

4-2. データシートについて

第四章「ファッションでの醜の手法」では、川久保玲のコム・デ・ギャルソンコレクションを分析し、伝統的な「美」に対する挑戦として「醜」の新しい解釈を探究する。ファッションでの醜の手法を分類（非形式性、不正確性、歪曲）し、川久保玲のデザイン手法を検討することで醜の手法の議論化を目指す。また、1991年から2024年までのコレクションを分析し、「醜」の手法の時間的な変化と発展を明らかにする。

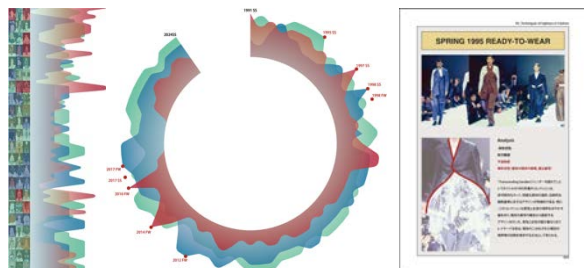


fig01. 川久保玲の RUNWAY の傾向 01

fig02. 川久保玲の RUNWAY の傾向 02

fig03. ファッションでの醜の手法を分析するためのデータシート

第五章 事例研究

5-1. 醜の手法の分類

5-2. アイコンについて

5-3. データシートについて

5-4. モデル分析

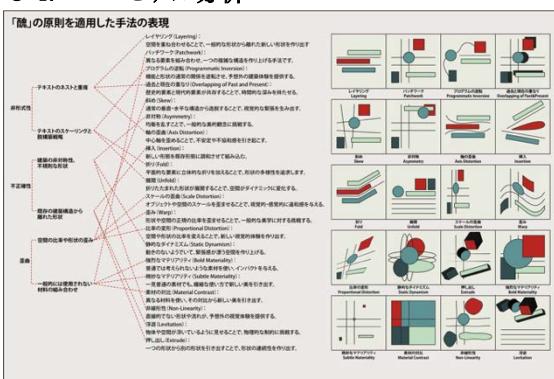


fig04. 醜の原則を適用した手法の表現

fig05. データシート 100 作品の傾向

第五章「事例研究」では、建築における「醜」の手法をファッションでの「醜」の手法を適用して、解体主義建築を中心に分析する。まず、ファッションで見出された「醜」の手法をアイコン化し、それらを建築に適用する方法を検討する。さらに、1988年のMoMA（ニューヨーク近代美術館）で開催された「デコンストラクティヴィスト・アーキテクチャー」展に参加した7人の建築家の100作品を分析し、解体主義の建築

における「醜」の手法を分類し、その特徴を明らかにする。

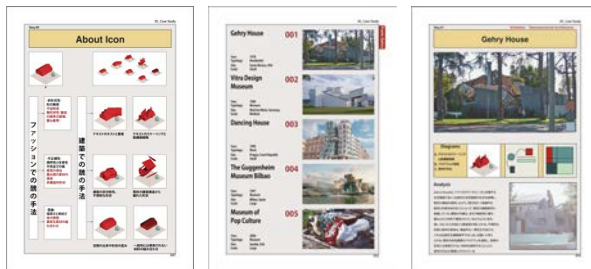


fig06. ファッションでの醜の手法を建築での手法で分類

fig07. 建築での醜の手法を分析するためのデータリスト

fig08. 建築での醜の手法を分析するためのデータシート

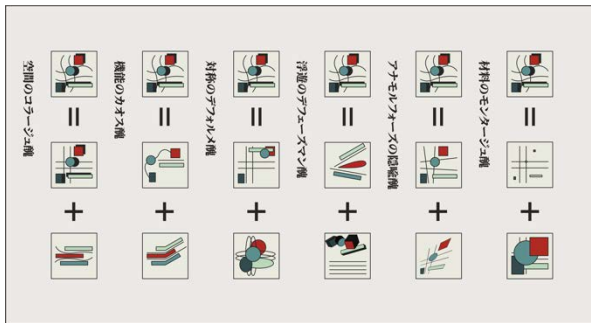


fig09. 建築における「醜」のかたち

第六章 DMZ の概要

6-1. DMZ の概要

6-2. DMZ の現状

6-3. 長湍駅の概要

第六章「DMZの概要」では、朝鮮半島の非武装地帯（DMZ）とその地域にある長湍駅について語る。DMZは朝鮮戦争休戦協定により設定された、韓国と北朝鮮間の4km幅の緩衝地帯で、政治的緊張の象徴としての役割を持つとともに、多様な生態系を保護する重要な生息地でもある。長湍駅は朝鮮戦争の影響で廃墟となった旧鉄道駅である。

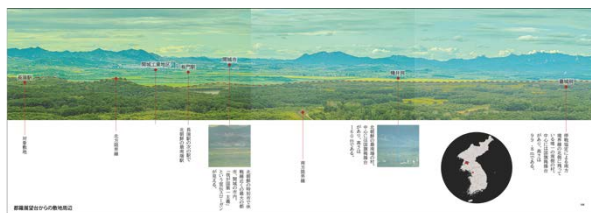


fig10. 都羅展望台からの敷地周辺

第七章 設計提案

7-1 設計概要

7-2 建築設計

第七章「設計提案」では、DMZにシードボルトと平和をテーマにした設計を提案する。本設計は、自然災害や人間の介入から種子を保護する施設であるシードボルトを中心に構成し、DMZの生態学的多様性を媒体として平和について深く考えることができるような空間を提供することを目的とする。具体的には、廃墟の長湍駅を再構成し、平和記念空間とシードボルトを含む複合文化空間を創出することを目指す。

主要参考文献

ローゼンクランツ、カール (2007)『醜の美学』未知谷
アドルノ、テオドル・W. (2019)『美の理論』河出書房新社
エーコ、ウンベルト (2009)『醜の歴史』東洋館林
Park, Wol Mi, Bae Soo jeong, (2012) 「A Study on the Aesthetics of Ugliness Applied into Contemporary Art and Fashion -Focused on Adorno's Aesthetic Theory-」『Journal of the Korean Society of Design Culture』 vol.18, no.3, pp. 201-214 (14 pages). The Korean Society Of Design Culture543sq ~